

国語教育（読解指導）

佐藤 明宏

近年の読解指導の動向として、①主体的な言語活動の充実、②メディアリテラシーの読解指導、③特別支援を必要とする子どもの読解指導、の3点をあげる。

①主体的な言語活動の充実

文部科学省より平成23年10月に『言語活動の充実に関する指導事例集』【小学校版】が、平成24年6月に『言語活動の充実に関する指導事例集』【中学校版】が刊行された。事例集には、例えば「読んだ本について好きなところを紹介する事例（小学校1年）」があげられている。好きなところというのは子ども一人一人によって違う。この単元はそういう「自分はどうか読むか」という主体性重視の考えに基づいているのである。

教科調査官水戸部修治は、単元を通して、そういう子どもの目的意識に貫かれた言語活動を設定する意義と方法について論述している（水戸部修治「単元を貫く言語活動を位置付けた国語科の授業づくり」『実践国語教育研究』2012年4/5月号より隔月で連載）。

②メディアリテラシーの読解指導

全国大学国語教育学会は、課題研究「『メディア』から国語教育の研究と実践を展望する」を、平成22年10月の第119回鳴門大会、平成23年5月の京都大会、平成23年10月の高知大会と3回に渡って行った。その論文集が平成24年9月刊行の『国語科教育』（第七十二集）に収録され、その中で栗野志保は、『火垂るの墓』のアニメ版とテレビドラマ版との視聴比

較により、語りの視点の違いに着目させたもの、表現学習の中で、写真と言葉の相関により、同じ写真、言葉が全く異なって読めることに留意させたもの、異なる複数の『赤ずきん』絵本の比較を通して絵とセリフの相関から人物造型を考えさせたもの、などの実践事例を報告している（栗野志保「表現メディアに着目した小学校国語科における読解表現学習の試み」『国語科教育』（第七十二集））。

メディアの多様化・高度化という子どもの言語生活の変化に応じて、写真や動画などの映像テキストを取り入れた授業実践の開発が進められているのである。

③特別支援を必要とする子どもの読解指導

昨今は普通学級の中に6パーセントはLDやADHDなどの特別支援を必要とする子どもがいるという状況になってきた。そこで、桂聖はそういう子どもに焦点をあてた国語科のユニバーサルデザインについて提言している（桂聖『国語授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社、2011年）。

論者（佐藤明宏）も2012年10月に編著『特別支援の子どもの言語力をどう育成するか』（明治図書）を刊行し、スクリーニングテストを使った読解指導の実践事例を紹介している。

以上のように、読解指導は「教師が一斉指導の中で、文字テキストの読解スキルを画一的に与えていく」というスタイルから、今回あげた①②③のような、もっと子ども一人一人の主体的な読解力を今の子どもの言語生活に即した形で伸ばしていく方向に向かっているのである。

（香川大学）

【表現学関連分野の研究動向】
国語教育（表現指導）

山下 直

平成24年に見られた興味深い動向として、二つの動きに注目したい。

一つ目は、文法や語彙の学習との関連を具体的に捉えようとする動きである。

10月に富山大学で開催された第123回全国大学国語教育学会富山大会のラウンドテーブル「作文と推敲に関わる語彙・文法事項に関する研究」では、表現指導にいかにつなげるかという視点から、学習者の作文などに実際に見られる文法的な問題点の分析が試みられた。

松崎史周（目白大学）は文のねじれや同類の節の重複、宮城信（小山高専）は形式名詞「こと」使用の実際をふまえ、文法や語彙の学習と表現指導との関わりに迫った。

また、矢澤真人（筑波大学）、安部朋世（千葉大学）は、平成21年度全国学力・学習状況調査中学校国語A問題の、

- ・この（＝モナリザ）絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合います。

を取り上げた。この問題は正答率が50.8%と低く、報告書でも「主語と述語を適切に対応させて書くことに課題がある」とされている。

矢澤・安部はBCCWJで「特徴は」を主語とする文を調べ、主述のねじれが約7%生じていることを指摘した。また、「特徴」以外にも「性質」などの抽象名詞について同様の調査を行い、抽象名詞を主語とする文のねじれを修正するには、主語と述語の対応だけでなく、その名詞の用

法・文型に関する知識、対応する形式名詞に関する知識などへの着眼が必要であることを示した。

文法や語彙の学習を表現能力の向上にいかにつなげるかは国語教育の大きな課題の一つであり、これらの試みは、表現指導と語彙、文法の学習の関わりについて、具体的な方向性を模索する上で重要な示唆を与えるものと言える。

二つ目は、7月に大修館書店から刊行された島田康行著『「書ける」大学生に育てる—AO入試現場からの提言』をはじめとする高等教育との連携を視野に入れた動きである。

本書は「大学進学を目指す高校生は、文章を「書くこと」をどのように学ぶのだろうか。一方、大学に入学する学生には、どのような「書くこと」の力が求められているのだろうか。「高大接続」のプロセスは、その両者の間でどのように働いているのだろうか。」（「はじめに」より）といった問題意識に立脚している。

これは、初等中等教育段階を中心に論じられてきた表現指導の研究に、高大接続、高大連携という視点を持ち込むことの重要性、必然性を我々に改めて認識させる。大学ではどのような能力が求められ、そのために高等学校段階までにどのような能力を身に付けさせておくことが必要なのか。大学における表現指導の重要性を認識せざるを得ない現状において、高大接続、高大連携の視点はこれからの表現指導を論じる上で不可欠なものとなっていくであろう。

（文部科学省）

日本語教育

大野 早苗

2012年4月、NHKがウェブ上でやさしい日本語(外国人にもわかりやすい日本語)によるニュース、News Web Easyの試験公開を始めた。外国人にやさしい日本語をという発想は、野元菊雄の簡約日本語にさかのぼる。簡約日本語そのものは実用に至らなかったが、阪神・淡路大震災を契機として、外国人に対してやさしい日本語で災害情報などの提供を行うための研究、開発が進み、また、一方で、日本在住の外国人の増加に伴い、地域社会での生活に主眼を置いたやさしい日本語への取り組みがなされてきた。News Web Easyの公開は、やさしい日本語が日本語の1つの表現として確立してきたことの現れであると言えるだろう。

従来の主に留学生を対象とした日本語教育では、集中的に、ある程度時間をかけて日本語を学習するという前提があった。しかし、地域社会における日本語教育では、学習者は必ずしも十分な時間を日本語学習に割くことはできず、また、途中で学習を止めざるをえないことも多い。そこで必要とされるのは、学習の途中段階でも学んだ日本語を用いて意思疎通ができることを念頭におきつつ、文法や語彙を制限したやさしい日本語となる。

現実の使用実態に鑑みたやさしい日本語のための初級文法シラバスは、庵(2009)で提案され、それに基づくテキスト『日本語これだけ1・2』(ココ出版)が出版されている。実際の使用に則した文法を整備するというのは、すなわち、日

本語教育文法を確立するというのであるが、そのための研究として、2012年には、使役表現に焦点を当てて使用実態と初級教科書の分析を行った岩田(2012)、使役と受身の導入順序について論じた庵(2012)などが発表されている。

また、様々な文書のやさしい日本語への書き換えについての研究も進められている。川村・北村(2012)は、自動書き換えシステムの開発を目指したものの、宇佐美(2012)は、書き換え作業者の意識を調査し、作業時の思考プロセスを考察したものである。

この他、情報処理や放送研究の分野でも、やさしい日本語のための研究として、文章の難易度測定の方法、やさしい日本語の理解度の測定などがなされている。News Web Easyは、2013年4月から本格公開される予定であり、やさしい日本語のための研究の重要性は、ますます高まっていくものと思われる。

文献(引用順)

庵功雄(2009)「地域日本語教育と日本語教育文法—「やさしい日本語」という観点から—」『人文・自然研究』3号/岩田一成(2012)「初級教材における使役の「偏り」と使用実態」『日本語/日本語教育研究3』ココ出版/庵功雄(2012)「文法シラバス改訂のための一試案—ボイスの場合—」『日本語/日本語教育研究3』ココ出版/川村よし子・北村達也(2012)「やさしい日本語への書き換えリストの作成とその評価」『日本語教育学会秋季大会予稿集』/宇佐美洋(2012)「難解文書の書き換えプロセスに見られる「評価」への意識」『日本語教育学会秋季大会予稿集』(順天堂大学)

認知言語学

長谷部陽一郎

認知言語学では、言語を人間の基本的認知能力および社会や対人関係を含む広い意味での外部世界とのインターアクションの観点から分析・記述する。1980年前後に生まれた認知言語学は、比較的新しい言語学上のパラダイムであるが、30年という英語で言うところの「1世代」(generation)を経て、1つの節目を迎えようとしている。海外でもまた国内においても、認知言語学を構成する様々な理論や概念をあらためて整理しなおし、理解を共有しようという試みが行われている。ここではそのような動きの中で特に象徴的と思われる出版物をいくつか紹介したい。

海外においては、構文理論の第一人者 Adele E. Goldberg が Langacker、Lakoff、Talmy、Croft など認知言語学を代表する研究者たちによる過去の重要論文をまとめた書物 *Cognitive Linguistics* (2011, Routledge) を完成させた。これは全5巻、75編の論文から成るアンソロジーで、カテゴリーのネットワーク、使用依拠モデル、意味の身体性といった認知言語学の基礎となる概念を扱った初期の論文に加え、認知言語学に基づく言語習得モデルや、大規模コーパスおよび統計手法を用いた定量的研究手法といった、近年注目を集めている新しい領域の重要論文も収められている。約30年間の研究の流れを一望できるコレクションである。

一方、国内でも今日の認知言語学の根幹を作ってきた研究を再確認しようという動きがあり、それは長らく待たれてきた海

外重要文献の翻訳書の完成として現れている。例えば、認知言語学における最も体系的な文法理論の1つ認知文法 (Cognitive Grammar) の提唱者である Ronald W. Langacker の著書 *Cognitive Grammar: A Basic Introduction* (2008, Oxford University Press) の翻訳『認知文法論序説』(2011, 山梨正明監訳, 研究社) が刊行された。Langacker の研究は日本語の表現を扱う研究者によっても度々言及されてきたが、本書の完成で、より広くその理解が共有されるものと思われる。なお、2013年には上記原書から認知文法の初学者にとって特に重要な4つのセクションのみを取り出し、600ページ近いオリジナル版の約半分の分量となるよう再構成された書籍 *Essentials of Cognitive Grammar* (Oxford University Press) が出版された。このことも Langacker による原書およびその翻訳の重要性を物語っている。

その他、Alan Cruse による *Meaning in Language* の翻訳『言語における意味』(2012, 片岡宏仁訳, 東京電機大学出版局) が出版された。これは認知言語学の観点から言語の意味に関する幅広い現象を扱った定評ある書物であり、すでに2回の改版を重ねた原書の翻訳である。従来の意味論と認知言語学に基づく新たなアプローチの関係を把握するのにきわめて有用な1冊である。

表現研究と認知言語学研究の接点は小さくない。認知言語学の分野で積み重ねられてきた知見を広く、また正確に参照することの重要性は今後増していくだろう。そのような中、上で紹介した近年の状況は頼もしい追い風になると思われる。(同志社大学)

文学研究(古典)

咲本 英恵

源氏物語と、その享受作品としての中世の物語を研究している立場から見て、2012年に発表された論文の中から、表現の研究として興味を持った次の4本を紹介したい。

高橋早苗『源氏物語』の「たぐひなし」一紫のゆかりの女君たちをめぐって—(『中古文学』第90号)は、従来解釈に揺れを持つ桐壺巻の「たぐひなし」を光源氏による藤壺賞賛表現として特徴的な語彙であるとし、それがのちに紫の上に対しても用いられることで、「光源氏の人生に深々と横たわる、「紫のゆかり」をめぐるふたつの恋」を象徴するとした。また若菜下巻で柏木が女三の宮を賞賛する時にも「たぐひなし」が使われることで、「たぐひなし」が柏木と光源氏の「密通の恋」の繋がりを浮かび上がらせ、しかも女君の内実を理解し得ない男による女君への賞賛表現に変化しているともいう。ある人物に限定的に使用される「意図的な形容表現という観点」にさらなる表現探求の可能性を示したものであり、表現研究の重要性をあらためて考えさせられた。

内藤英子「好忠歌と女流文学—『紫式部集』を中心に—」(『古代文学研究第二次』第21号)は、好忠歌が平安女流歌人に撰取されていく様相、とくに紫式部集における「雪」や「深山辺」「憂さ」「埋もれ」等の和歌表現における好忠歌の影響を論じる。曾禰好忠は説話や公家日記などにしばしば奇人として現れる、歌風の新奇

さを特徴とする歌人である。内藤氏は、平安女流歌人がそのような好忠の和歌表現を撰取したところに、「男性文学への執心」を指摘し、さらに好忠歌の源氏物語へ影響をも示唆する。

平田英夫「和歌の起源をめぐる序文の言説をめぐって」(『日本文学』61.7)、岡崎真紀子「勅撰和歌集序という論理——『千載集』から『新続古今集』へ——」(同)は、ともに勅撰和歌集序文における間テクスト性を論じ、千載集序に触れる。

平田氏は、古今集仮名序の「このうたあめつちのひらけはじまりける時よりいできにけり」という言説が中世期にさまざまに意味づけられ、表現されていくなかで、千載集序において天地開闢の時が「神代」という抽象的語彙によって表されることに注目し、そこに仏法の権威を利用して和歌を称揚する俊成の意図を読み取る。岡崎氏は古今集仮名序「生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」という言説が、千載集序で「この世に生まれと生まれ、我が国に来たりと来たる人は……この歌を詠まざるは少なし」と変奏されるが、そこに天竺発祥の仏教を意識することで和歌をわが国のものとして認識するという俊成の意図を読む。そしてこの俊成の仏教的な解釈は、一条兼良による新続古今集序では、儒学的語彙がその表現に取り入れられつつ、君臣和楽思想に変奏されるという。両氏が指摘した、俊成の歌道即仏道という和歌観によって勅撰集序の型が変奏されるさまは、変容・改作・パロディを積極的に許容していく中世文芸の在り方を考えるうえで示唆的であった。

(共立女子大学)

文学研究(近代)

永井 善久

筆者に与えられた課題は、2012年の日本近代文学研究における表現学関連分野の研究動向の報告である。ちなみに、2011年を担当したのは深津謙一郎氏だった(『表現研究』第95号)。深津氏は学会誌の編集委員を務めた御自身の経験に基づき、近代文学研究の主潮が「文化研究」にあり、文学テキストの表現機構をめぐる研究は衰退気味であることを的確に指摘している。つまり、文学テキストを特権的に扱うのではなく、同時代言説のなかで相対化し、そのイデオロギー性を剔抉する類の研究が主流となっているというのである。

2012年もこのような潮流はさほど変化していないと思われる。象徴的な出来事が、日本近代文学会の11月例会、「文学研究というシステムを問い直す」と銘打たれた特集である。研究者が自らの特権性に無自覚なまま、文学テキストの分析に没頭することは許されない——まさにそのようなコンセンサスが定着したかのようなイヴェントであった。

以下、深津氏が言及していない「文化研究」に属するここ数年の主な研究を振り返ってみよう。まず曾根博義氏が、「同時代言説病症候群」(『国語と国文学』2007・5)と嘆いた(?)研究の極北、五味渕典嗣『言葉を食べる』(世織書房、2009・12)を取り上げよう。1920年代の谷崎潤一郎の小説テキストを、同時代言説編成に半ば強引に関連付け、その可能性を探り出そうという意欲的な

仕事で、その研究方法の是非をめぐる活発な議論がなされた。また作家神話を相対化するカノン批判としては、松本和也『昭和十年前後の太宰治』(ひつじ書房、2009・3)が刺激的だった。「実体(論)的な太宰治」を徹底的に斥け、同時代の言説編成のなかで太宰の小説テキストを読み込む松本氏の仕事は、五味渕氏の方法と共通するところが少なくないと思われる。2012年の研究書に限ってみれば、笹尾佳代『結ばれる一葉』(双文社出版、2012・2)なども、作家表象のイデオロギー性を分析した仕事として興味深い。

以上、長々と表現学分野からは離れた研究を紹介してきたが、近代文学研究(散文)について言えば、このような「文化研究」的な動向が今後も主流をなすと思われる。

しかしながら、2012年にはストイックに小説テキストの表現について考究する書籍も、学界を牽引する二人の泰斗により上梓された。中村三春『花のフラクタル』(翰林書房、2012・1)は、20世紀の前衛小説を「単純にイデオロギーや時代性によって裁断」することなく、テキストの表現の可能性を精緻に分析している。また安藤宏『近代小説の表現機構』(岩波書店、2012・3)は、「小説が「小説」であるための仕掛けや仕組み」＝「表現機構」の変遷を通史的に論じた書である。上記二著の紹介をもって、与えられた課題に対するささやかな報告としたい。

(明治大学)

日本語学

田島 優

2012年10月に三宅和子他編『「配慮」はどのように示されるか』（ひつじ書房）が刊行された。ここ数年「配慮表現」に関する書籍の刊行が続いている。三宅和子『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』（2011年1月 ひつじ書房）、山岡政紀他編『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』（2012年2月 明治書院）。

「配慮表現」という用語はブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論を紹介した生田少子「ポライトネスの理論」（『言語』26巻6号 1997年）で使用された。そして2001年12月に答申された「現代社会における敬意表現」において、敬意表現の定義として「相手や場面に配慮して使い分けしている言葉遣い」と示されたことで、にわかに「配慮表現」という概念に関心が向けられた。1980年代から注目の言語行動の研究を行ってきた杉戸清樹は、彼の主導の下で、国立国語研究所の報告書として『言語行動における「配慮」の諸相』（2006年 くろしお出版）を発表した。同じく1990年代から日本語の気配り表現を扱ってきた彭飛もその研究を『日本語の「配慮表現」に関する研究』（2004年 和泉書院）の名でまとめた。彭飛のこの著作は「配慮表現」研究の初期の段階のものであるが、体系的に幅広く論じられている。

「配慮表現」は、1990年代から進み始めた「前置き表現」研究や「言いさし表現」研究、副詞の意味用法研究の一部を

取り込む形で進められてきた。ポライトネス理論がもともと語用論研究の流れの中で発表されたものであるため、非定型表現をも含み、また配慮言語行動へと進むのは自然な流れであろう。しかし、表現研究としては、多門靖容「定型の前置き表現のダイナミズム」（森雄一他編『ことばのダイナミズム』2008年 くろしお出版）が示すように、定型表現をまず扱ってから進めていくのが整理しやすいであろう。

冒頭に挙げた『「配慮」はどのように示されるか』には、前置き表現の歴史的研究を扱った高山善行「日本語の配慮言語行動の歴史的研究」が収められている。「配慮表現」の歴史的研究については、科学研究費の報告書である野田尚史編『日本語の対人配慮の多様性』（2009年）にも論文が含まれており、また近いうちに野田尚史他編『日本語の配慮表現の多様性』（くろしお出版）として刊行されると聞く。

狂言の台本には依頼や断りの場面などに定型化した前置き表現が見られる。定型化したものを基本とし、その発想を把握することによって、そのヴァリエーションを押さえることができる。また、定型化の変遷（例えば骨折りなれども→大儀ながらなど）によって、和語から漢語系への表現の変化や、発想の変化などを見ることができよう。

場面における表現に先立つ前置き表現や程度副詞が、本来の表現に変わってその機能を発揮できるのも定型化によるものである。

（宮城学院女子大学）

文章・談話研究

湯浅千映子

文章・談話とその構成要素に関する研究は、隣接分野の研究とともに2012年も引き続き活発な動きを示しており、関心の高さがうかがわれる。

談話では、非母語話者の会話教育への活用を目的とした著書が相次いで発刊された。雑談の連鎖構造を分析した筒井佐代『雑談の構造分析』(くろしお出版)や大場美和子『接触場面における三者会話の研究』、中井陽子『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』(いずれもひつじ書房)等である。また、特定の表現意図や場面の談話構造に関する研究に、金庚芬『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』(ひつじ書房)、柳慧政『依頼談話の日韓対照研究』(笠間書房)、田中妙子「ドラマのシナリオに見られる『慰め発話』の諸相」『日本語と日本語教育』40、生天目知美・劉雅静・大和啓子「日中韓の友人会話における依頼の談話展開」『筑波応用言語学研究』19、高宮優実「対立場面における会話のストラテジー」『ことば』33、日高水穂「『察し合い』の談話展開に見られる日本語の配慮表現」『「配慮」はどのように示されるか』(ひつじ書房)があった。一方で、談話の話し言葉の形式に着目した研究も見られ、荻原稚佳子「日本語自由会話における『言いさし』使用と解釈の難しさ」『明海大学外国語学部論集』24、高木丈也「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる『中途終了発話文』の出現とその機能」『社会言語科学』15、石黒圭「談話の『場』によるコ系・

ソ系・ア系の指示詞の使い分け」『表現研究』96等があった。

様々なジャンルや媒体・ツールにおける研究も目を引いた。講義の談話と受講者のノートを対応させた伊能裕良「講義理解の手がかりとしての接続表現」『早稲田日本語研究』21、謝罪場面の携帯メールを扱った三宅和子「電子メディアを介した日英の配慮言語行動」(『「配慮」はどのように示されるか』所収)や大沢裕子・安田励子・郷亜里沙「Webサイト上の苦情に対する「謝罪の展開」モデルの提示」『待遇コミュニケーション研究』9、船戸はるな「継続的な文字チャットによる日本語学習者の終助詞「ね」の使用の変化」『日本語教育』152等が挙げられる。

文章では、新聞社説の文章の全体的構造の類型を示した Didik Nurhadi「日本語社説の文章構造における統括性」『名古屋大学国語国文学』105の他、アカデミック・ライティング指導の必要性に鑑み、母語話者と学習者の意見文の文章構造の特徴を明らかにした吉田美登利『日本語作文産出過程の分析と支援ツールの開発』(風間書房)、伊集院郁子・高橋圭子「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴」『日本語・日本学研究』2(東京外国語大学)が見られた。

総じて、日本語教育の現場への還元を最終的な目的に据える研究が顕著な1年であった。今後も非母語話者が子細な感情や配慮を相手に伝えるのに有用な、文を超えるレベルの研究の広がりが予想される。また、話し言葉と書き言葉の中間的な性質を有するメール、チャットなどネット上の表現の研究にも期待したい。

(早稲田大学院生)

修辞学

香西 秀信

外山滋比古の『修辞的残像』は、本人が修辞学とは何の関係もないと明言しているのも関わらず、「修辞」という題名が付いているだけで、修辞学の研究に分類されることがある。修辞学やレトリックは、そういう風に、実際の内容とは無関係に、ただその言葉だけが、単なる表現分析の論文の題名にしばしば使用される。だが、修辞学(レトリック)とは、論理学と同様に、独自の歴史的発展による体系を備えた固有の学問の名称であり、表現分析を扱っておれば何でもその名で呼べるといったものではない。したがってここでは、やや厳格に、rhetoricという学問で蓄積された技法、方法に関わる研究だけを扱うことにする。

第一に、われわれは、森雄一の『学びのエクササイズ レトリック』(ひつじ書房)に注目しよう。これは、大学生向けのレトリックの教科書であるが、【研究動向】欄で取り上げるに足るほどの、独創的な意匠に満ちた労作である。例えば著者は提喩研究の第一人者なので、おそらく提喩に相当のスペースを割いて、高度の議論を展開しているのではないかと予想されるであろう。だが、実際には、提喩は、直喩、隠喩とセットにされて、ただ一章の中に押し込まれているにすぎない。その代わりに、換喩が独立した一章を与えられ、理論的にやや深く論じられている。これは、森の教科書が、大学での教授経験から出来上がったことをよく示している。私も何年か大学で比喩について教

えたことがあるが、学生が最も興味を示し、面白がるのが換喩なのだ。さらに、比喩を教えるにしても、いきなり用語から入るのではなく、われわれの言語がいかかに比喩に満ちているかの説明から始め、比喩の効能に進み、比喩とことわざに回り道した後、四章になってやっと直喩や隠喩という用語とその定義が教えられる。著者の狙いが、知識の習得ではなく、「レトリック感覚」の育成にあることがよくわかる組み立てである。

第二に、やや変則であるが、山口誠一訳著と銘打たれた『ニーチェ『古代レトリック講義』訳解』(知泉書院)はどうしても取り上げなくてはならない。これだけの翻訳と解説は、第一級の「研究」である。本書の原典は、ニーチェが1872 - 73年に、バーゼル大学でたった二人の学生を相手に行った講義の草稿をまとめたものである。私は以前にSander L. Gilmanらの編集したテキストで読もうとして、あまりの詰まらなさに途中で投げ出してしまったことがあるが、今回翻訳で読んで、やはり詰まらなかった。はっきり言って、無味乾燥の極致である。だが、この講義録は読者には利益をもたらさないかもしれないが、ニーチェには大いに役に立った。彼はこの講義の準備をしていて、言語が本質的に比喩であり、したがって言語によって真理は表現・伝達できないという思想を獲得したのである。ニーチェの思想が形成されるドラマは、全十六章のうち、わずか一章で展開されるにすぎないが、それだけでも本書を購入する価値はある。読めばほんの少しだけ感動する。

(宇都宮大学)

【表現学関連分野の研究動向】

言語学

高坂 京子

言語学の2012年度の研究動向について書くようにとのことであったが、あまりに広範なので、ここでは表現研究に関連すると思われる意味論と語用論の分野を中心に、筆者の関心をひいた研究を取りあげたい。

意味論の分野では、近年、認知意味論の研究が注目されており、海外では大御所J. Taylorの「言語はいかに心の中で表示されるか」を論じた新著*The Mental Corpus: How Language Is Represented in the Mind* (OUP) が刊行されたが、国内でも研究の先端をいく山梨正明氏のこれまでの成果が、著書『認知意味論研究』(研究社)として出版された。後者は、イメージ操作、メタファー写像などの認知言語学の視点から、日常言語の概念体系に関わる言語現象が丁寧に考察されており、小説、詩、落語、ジョークなどからの豊富な具体例を用いた分析は、たいへん刺激的で学ぶところが多い。

また、これまで曖昧であった意味論と語用論の境界を明確にし、意味理論のあるべき姿を示そうとしたのが今井邦彦・西山祐司著『ことばの意味とはなんだろう—意味論と語用論の役割』(岩波書店)である。認知語用論として位置づけられる関連性理論をベースに、徹底したデータ分析を行いながら、語用論の意味は意味論の意味に制約されていることを論じ、ことばの意味に関わる現象に新たな洞察を加えた。

意味論の分野でもう一点、特筆すべき

は、小田涼著『認知と指示一定冠詞の意味論』(京都大学学術出版会)である。日本人にとって難しいと言われる英語とフランス語の定冠詞を取りあげ、ことばが置かれる「場」に着目する方法で冠詞の用法の明確な説明を試みている。2012年度渋沢・クローデル賞(日仏間で、相手国の文化に関する優れた研究に贈られる賞)を受賞した力作である。小説や新聞、映画などからの用例が豊富で、冠詞にまつわるコラム記事も面白く、定表現を考えるうえで貴重な一冊である。

次に意味論・語用論の延長線上にある研究として、コーパス言語学の文献を紹介する。コーパス言語学は2012年度日本語用論学会のシンポジウムのテーマにも取りあげられ、海外ゲストを交えて活発に議論された。そのときの発表者でもある石川真一郎氏の『ベーシックコーパス言語学』(ひつじ書房)は、英語と日本語の両方を視野に入れながら、コーパス言語学の最新状況を概観する充実した内容の入門書で、コーパスを用いたさまざまな研究例も参考になる。

最後に、ガイ・ドイッチャー著・椋田直子訳『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』(インターシフト)を挙げておく。一般書ではあるが、「サピア=ウォーフの仮説」が真か否かを、近年の研究を追いながら論じた興味深い一冊で、原著はすでに海外で年間ベストブック(2010年エコノミスト誌他)などをいくつも受賞している。言語学や言語表現を扱った著作がこのように一般の注目を浴びるのは喜ばしいことである。

(立命館大学)